

〈原著論文〉

家庭科教育における生活時間の計画化

広島大学教育学部 平 田 道 憲

キーワード：家庭科教育 生活時間研究 生活時間の計画化 道徳教育

〔要旨〕

本稿の目的は、高等学校家庭科の「生活時間と労力の管理」という項目の中の「生活時間の計画化」という分野を題材として、生活時間研究と家庭科教育学研究との結びつきを検討することである。高等学校家庭科の学習指導要領を検討したあと、一般の生活時間研究の分野における生活時間の計画化に関連する研究の流れを整理するとともに、高等学校家庭科の生活一般の教科書の記述から生活時間の計画化のあつかいを分析した。高等学校家庭科における生活時間と労力の管理の分野は生活時間研究の成果をふまえて教育内容がつけられている。しかしながら、生活時間の計画化の分野の教育内容は生活時間研究の成果と結びついていない。このような研究と教育との乖離がみられるのは、家庭科教育があつかう生活時間の計画化が、生活の向上という倫理・道徳と結びついており、現在の生活時間研究においては、こうした倫理・道徳の観点からの研究がほとんどなされていないからである。

1. はじめに

筆者はこれまで生活時間研究に従事してきた。これは、研究としてのテーマである。現在、家政教育学の家庭経営分野の講義を担当する中で、家庭科教育の視点から生活時間をとりあげている。これは、教育としての内容である。筆者の場合、生活時間について、研究として従事してきた期間は家政教育学の分野で教育として担当している期間よりもかなり長い。

教育として担当した経験によって、生活時間を家庭科教育の観点から考えることには、生活時間研究一般としての観点からとらえることと共通する点と家庭科教育独自の視点とがあることを意識するようになった。生活時間を家庭科教育独自の視点から追究することによって、生活時間研究と家庭科教育学の研究とを結びつけることができるのではなからうか。生活時間研究が家庭科教育学の観点から新たな広がりを見せ、家庭科教育学の視点から生活時間研究をあつかうことの検討から家庭科教育学が追究すべき課題を見出すことができるのではないか。

本稿の目的は、高等学校家庭科の「生活時間の計画化」という家庭科教育分野に特有の視点を題材として、生活時間研究と家庭科教育学研究との結びつきを検討することである。本稿の内容は次

のとおりである。第一に、生活時間研究一般と家庭科教育における生活時間のあつかいについて生活時間研究の視点から検討する。第二に、高等学校家庭科における生活時間について学習指導要領の観点から明らかにする。第三に、高等学校家庭科における生活時間の計画化について、あらためて生活時間研究の観点から分析する。第四に、高等学校家庭科の教科書から家庭科教育における生活時間の計画化のあつかい方をとらえる。最後に、生活時間研究と家庭科教育研究の結びつきについてまとめ、教科教育学研究上の課題を述べる。

本稿は家庭科教育学分野を事例としたものであり教科教育学一般に広げることは無理であるが、教科内容学の研究を教科教育学の観点からとらえる一つの考え方を示すものであると思う。

2. 生活時間研究と家庭科教育

「生活時間とは、一定の時間、もっとも普通には、1日24時間を個人がどのように消費したかの記録である。生活時間の研究は、このような時間使用の記録を多くの人から集めて、時間配分の主要な傾向を分析し、また集団による相違を分析するものである [Converse, 1968].」これは、生活時間、生活時間研究の一般的な定義である。この定義からわかるとおり、生活時間研究の範囲は限定的なものでなく、多方面の領域にわたっている。既存の学問分野でみても、社会学、経済学、家政学、建築学、地理学など多くの分野で生活時間研究に注目している。

家庭科教育において生活時間をあつかうときも、ここでの一般的な生活時間、生活時間研究の定義に示される視点を含める必要はある。生活時間に注目することの一般的な意味や1日24時間の使い方を行動分類別に考えていくことなどは家庭科教育においてもあつかうべき内容である。これは、いわば生活時間を家庭科教育の観点から考えることと生活時間研究一般としての観点との共通点である。では、家庭科教育という視点で生活時間をとらえたとき、家庭科教育独自の視点にはどのようなものがあるであろうか。家庭科教育も、学校段階としては小学校、中学校、高等学校の区別があり、教育方針、教育内容も異なる部分がある。本稿では、筆者が教育を担当している高等学校家庭科の範囲で検討していくことにしたい。高等学校家庭科に限定しても、細かくみれば多くの家庭科独自の視点があると思うが、ここでは、大きく次の二点をとりあげる。第一はジェンダーの視点、第二は生活時間の計画化や自由時間の充実した過ごし方という視点である。

第一のジェンダーの視点は、家庭科が家庭生活を対象とする教科であることからくる独自性である。家庭生活を支える二つの労働である職業労働と家事労働をあつかうとき、現在の日本における男性と女性の家庭内での役割分担の実態と意識を考慮すれば、ジェンダーの視点を含めずに教育することは困難である。とくに高等学校家庭科においては、学習指導要領が女子のみの必修から男女ともに必修へと改訂され、それが実施に移された1994年からまだ日が浅いという現実もジェンダーの視点を含める必要を要請している。なぜ女子のみの必修であったものが男女ともに必修になったかを説明するためにジェンダーの視点を欠くことはできないからである。この第一の視点は確かに家庭科独自のものではあるが、既存の学問分野の中でも家庭科教育と関連の大きい家政学において

は一般的な視点である。生活時間研究一般の観点から考えても集団の違いや注目すべき生活行動の重点の置き方の違いによる特徴であり、研究と教育との間に違和感を覚えるようなものではない。

第二の生活時間の計画化や自由時間の充実した過ごし方という視点は、家庭科が対象とする家庭生活を理解することよりも、家庭科という教科の目標の中にある実践的態度の育成に関連した独自性であるといえる。生活時間について学習したことを家庭や社会で実際に生かそうとするときには、どうしたら時間を無駄なく有効に使えるか、どうしたら自由時間を充実して過ごせるか、といったことにまでふみこんで教えていく必要がある。そのためには、時間を無駄に使わないようにするといった道徳的側面やどういう自由時間の使い方が充実した過ごし方であるかといった価値判断をふまえた教育が必要になるかもしれない。この第二の視点は、上述した生活時間研究の一般的な定義には含まれにくい独自性である。一般的な定義に基づいた生活時間研究の成果に基づいて教育内容を考えようとするとき、生活時間の計画化や自由時間の充実した過ごし方という視点には違和感を感じるのである。

3. 高等学校学習指導要領における生活時間

ここで、あらためて1989年の高等学校学習指導要領から家庭科における生活時間のとりあつかいについてまとめておきたい [文部省, 1989a]。ここでは、多くの高等学校で必修としている家庭一般の中でどうあつかわれているかについて述べることにする。

家庭一般の内容は7項目で構成されている。生活時間はその中の(1)家族と家庭生活の中に含まれている。(1)の中では、イ 家族の生活と家庭経営であつかわれている。家族の生活と家庭経営は二つの視点からなり、一つは(ア)家庭経営の方針、今一つは(イ)生活時間と労力の管理である。家庭経営の方針の内容は次のとおりである。「家庭経営とは、家族の意志に基づいて家庭の方針や目標を定め、家族関係、家庭経済、生活時間、労力等との関連を図りながら生活の仕方を計画して実践することであることを理解させ、充実した家庭生活を営むための家庭経営の方針が立てられるようにする。」ここでは、生活時間は家庭経営を構成するものの一つとして位置づけられている。これに対して、生活時間の労力と管理では、生活時間はより具体的にあつかわれている。その内容は次のとおりである。「生活時間の配分や計画化、家事労働の特徴と能率化など時間と労力の管理の必要性について理解させ、家族の生活を考慮して、生活時間と労力が適切に調整できるようにする。また、家事労働と職業労働との関連について考えさせるとともに、自由時間については、充実した過ごし方の工夫ができるようにする。」

以上の学習指導要領の内容を前節で述べた家庭科独自の二つの視点に即してみると、第一のジェンダーの視点よりも第二の生活時間の計画化や自由時間の充実という視点を強調しているようにみえる。確かに、上記の内容だけをみるとジェンダーに関しては、家事労働についてあつかうよう記述されている程度である。しかしながら、ジェンダーに関してはむしろ家庭科という教科の目標の中の「男女が協力して家庭生活を築いていくこと」といった表現や1989年の学習指導要領の改訂の

要点の中にある「女子のみ必修の扱いを改め、男女ともに必修の教科とする」といった表現の中に示されているとみるべきであり、生活時間の内容もこれにそうべきであると考えられる。

したがって、家庭科教育においてジェンダーの視点から生活時間を理解させることは学習指導要領上からも必要なことであることは明らかであるが、上記の生活時間と労力の管理の中に「生活時間の計画化」、「家事労働の能率化」、「時間と労力の管理」、「自由時間の充実した過ごし方の工夫」などの実践的な内容が多く含まれていることにもあらためて注目すべきである。こうした内容をあつかうためには、上でもふれた道徳的側面や価値判断を避けて通れない部分があるのではなかろうか。つまり、こうした内容には、教科としての家庭科教育という意味だけでなく、道徳教育的な意味合いが含まれていると考えるべきかもしれない。

ここで、高等学校における道徳教育について検討しておきたい。小学校、中学校とは異なり、高等学校では教科とは別の道徳の時間はない。高等学校学習指導要領第1章総則によれば、「学校における道徳教育は、(中略)学校の教育活動全体を通じて行うことによりその充実を図るものとし、各教科に属する科目および特別活動のそれぞれの特質に応じて適切な指導を行わなければならない」とされている。もちろん、小学校、中学校においても道徳教育は学校の教育活動全体を通じて行うものとされ、道徳の時間はもとより、各教科においてもそれぞれの特質に応じて適切な指導を行わなければならないとされている[文部省, 1989b; 文部省, 1989c]。しかしながら、道徳の時間をもたない高等学校では小学校、中学校以上に道徳教育における各教科のもつ役割が大きいのといえる。生活時間と労力の管理の内容には高等学校における家庭科教育のもつ道徳教育的役割が含まれているのではなかろうか。

そこで本稿では、高等学校学習指導要領に具体的に記述されている「生活時間と労力の管理」に焦点をあて、その中でも「生活時間の計画化」を中心として生活時間研究と家庭科教育との関連を検討することにしたい。

4. 生活時間研究の中での「生活時間の計画化」

上で、一般的な定義に基づいた生活時間研究の成果に基づいて家庭科教育の内容を考えようとするとき、生活時間の計画化といったような視点には違和感を感じると述べた。では、一般的な生活時間研究の中で「生活時間の計画化」のような領域はどのようにあつかわれているであろうか。

実は、生活時間研究の歴史を人間の生活時間に対する関心にまでさかのぼってとらえると生活時間の計画化はむしろ関心の中心にあつたことが明らかにされている。時間そのものに対する関心は人間の歴史とともに古い。紀元前の哲学書、科学書の中ですでに時間というものは一つの重要なテーマとなっている。しかしながら、人間の時間の使い方である生活時間に関心が向けられるようになったのは時間そのものに対する関心と比べるとかなり新しいことであるといわざるを得ない。それは、一般には産業革命後のことであるといわれている。産業革命による工業の発達により、人間は、時間が希少な資源であるということ意識するようになった。この意識は「時は金なり」というフラ

ンクリンのことばに象徴される。

矢野は生活時間研究の歴史的経緯を考察するうえで、フランクリンの自伝の中にある時間に対する関心に注目している [矢野, 1995]。この自伝の中に時間の浪費を戒めることばがしばしば登場する。矢野によれば、フランクリンの自伝の中にある発想は単に時間の浪費を戒めるということだけでなく、次の三点に要約される。第一は「希少資源としての時間」である。時間を無駄にすることはお金を無駄にすることと同じである（「時は金なり」）ことの意味を説いている。第二は「人生を形作る材料としての時間」である。時間の節約を生活倫理の実践に結びつけている。第三は「未来志向ないし計画志向としての時間」である。よりよい未来を得るために現在の生活の計画をするという考えである。

筆者が家庭科教育の「生活時間の計画化」と聞いてすぐに思い出したのはこのフランクリンの自伝である。つまり、フランクリンの時間に対する関心は「生活時間の計画化」にあったといっている。その意味でいえば、生活時間に対する関心の初期の中心は生活時間の計画化であったかもしれない。この関心は今日に至るまで生活時間研究の中からなくなっているわけではない。生活時間研究が時間の希少性を問題の背景にもっている以上、時間という資源をいかに有効に配分すべきかという関心は常に研究の大前提としては存在しているといえる。

しかしながら、1960年代以降急速に発展した今日の生活時間研究の直接のテーマ、関心としては、本稿の2. で述べた生活時間研究の定義にあるような「時間配分の主要な傾向を分析し、また集団による相違を分析するもの」というものが多く、生活時間の計画化と直接結びつくような研究は少ない。今日では、フランクリンの自伝も、生活時間研究というよりも生活上の道徳を記したものと考えられている。

ここで、生活時間の計画化という観点から、時間と道徳を結びつける二つの視点を指摘しておきたい。第一は「時間を無駄にしない」という視点である。フランクリンが自伝で多く指摘している道徳である。第二は「時間厳守」という視点である。第一の視点がどちらかといえば個人の生活態度を規定する道徳であるのに対して、第二の時間厳守の視点は個人の生活態度はもちろんのこと、社会の中で他者との相互依存に関連するものである。時間を守らないことは他人の時間を無駄にすることにつながる。フランクリンの自伝には直接的に時間厳守を指摘した記述はないが、時間を守らないことは他人の時間を無駄にすることは明らかなので、間接的には時間厳守も含めて時間の無駄を戒めていると解釈することができる。生活時間研究の文脈の中で、時間と道徳とを結びつけるこの二つの視点と関連する研究がなかったわけではない。

生活時間研究の文脈における「時間を無駄にしない」視点は、時間効率や社会的ロスタイムの研究にみられる。時間効率で有名なものに、今世紀のはじめに職業労働時間における効率的な標準時間の設定を試みたテイラーの科学的管理法がある。社会的ロスタイムの研究には、社会主義国が登場した後の計画経済における職業労働上の無駄な時間（他の作業との関連での待ち時間や材料切れによる無駄な時間など）についての研究からはじまり、現在では交通渋滞、移動時間、待ち時間などの研究がなされている。「時間厳守」については、放送や鉄道などのスケジュール管理などの具

体的な研究に加えて、時間の希少性の中での時間厳守の意味についての研究などがある〔リンダー、1971；ムーア、1974〕。後者の研究では、時間厳守に厳密な社会は一面時間に縛られた社会であることも指摘されている。

生活時間研究の文脈で実施されたこうした研究を概観すると、研究の視点は個人的というよりもむしろ社会的であり、フランクリンがもっていたような道徳的な観点はほとんど含まれていない。では、生活時間に関する道徳的な観点からの研究はないのであろうか。一般的な生活時間研究を概観するかぎりにおいてはこうした研究はほとんど見いだせない。しかしながら、「どうしたら時間を有効に使えるか」、「どうしたらうまくスケジュールを管理できるか」といったことに関する国民の関心は決して低くはない。この意味からすると、生活時間研究は一般の人々の生活時間という比較的身近なテーマをあつかっているにもかかわらず、人々の知りたいことに必ずしもこたえていないといえよう。フランクリンの自伝には、単に道徳を説いただけではなく、どのようにしてこの道徳を実践するかについての記述があった〔フランクリン、1957〕。「どうしたら時間を有効に使えるか」、「どうしたらうまくスケジュールを管理できるか」といった実践的なテーマについては、むしろ生活時間研究以外の分野で多くの出版物が発行されている。書店には多くの「時間の使い方」のノウハウを示す本がならんでいる。こうした中にはいわゆるハウツーものとよばれるものも多いが、ケンドリックや野口の著作のように学術的な裏付けがなされているものもある〔ケンドリック、1991；野口、1995〕。

5. 高等学校家庭科教科書にみる生活時間の計画化

現在の生活時間研究における生活時間の計画化のあつかいはフランクリンが考えたような生活時間の計画化とは異なっている。家庭科教育における生活時間の計画化はフランクリンが考えた生活時間の計画化に近い。その意味からいえば、生活時間研究と一般の人々の知りたいこととの間にギャップがあるのと同様、生活時間研究と家庭科教育の生活時間の計画化との間にもかなりの乖離があるといえる。そうすると、家庭科教育における生活時間の計画化の内容については、必ずしも生活時間研究一般の研究成果だけではなく、もう少し範囲を広げて考えていかねばならないであろう。

ここでは、高等学校家庭科の教科書の記述から生活時間の計画化が具体的にどのようにあつかわれているかについて検討する。それによって、教科書のあつかいと現在の生活時間研究との間にどのような関連があるか、あるいは、教科書のどの部分が生活時間研究の成果とは異なる観点から記述されているかについて分析することができる。

本稿で検討した教科書は、平成10年度用高等学校家庭一般の次の6冊である（カッコ内は教科書番号）。

- 1) 一橋出版 家庭一般 ー生活をかえる（家庭543）
- 2) 大修館書店 家庭一般 豊かな家庭生活を共につくる（家庭542）
- 3) 実教出版 図説高校家庭一般（家庭509）

- 4) 教育図書 新家庭一般 生活の自立と創造をめざして (家庭534)
- 5) 中教出版 新・家庭一般 (家庭503)
- 6) 東京書籍 家庭一般 人間としての豊かな生活をめざして (家庭532)

各教科書から、学習指導要領の「生活時間と労力の管理」に相当する部分のページ数と主な内容、その中の「生活時間の計画化」に相当する部分のページ数と主な内容をまとめた。結果は表1に示すとおりである。ただし、教科書のどの部分が学習指導要領の各項目に相当するかについては、筆者の判断によった。ページ数の端数は行数でページ換算した。教科書の総ページ数は195ページから215ページの範囲にある。

はじめに、「生活時間と労力の管理」についてみると、記述ページ数は2.59ページから6ページの範囲にあり、かなりのばらつきがみられる。主な内容は小見出し以上の見出しに注目してまとめたものである。生活時間の実態あるいは分類で1日24時間の行動分類をあつかい、その中の家事労働と職業労働を見出しのある項目として記述していることは大部分の教科書に共通である。生活時間の計画化や自由時間の充実した過ごし方については見出しのある項目として記述している教科書と見出しとしてはかかげずに本文中で記述している教科書とがある。

生活時間の計画化について見出しのある項目を用意している教科書は6冊中3冊であった。見出しの場合はすべて「生活時間の計画」となっている。ただし、見出しが生活時間の計画であっても本文すべてが生活時間の計画化に関連する記述であるとは限らない。表1に示した生活時間の計画化に関するページ数は実質的な記述の部分に限定したものであるが、すべての教科書で1ページに満たない。比較的分量が多かった教科書は具体例を載せてある3)と5)の教科書でそれぞれ換算で0.47ページ、0.63ページである。とくに教科書5)は、生活時間と労力の管理に相当するページ数が6冊の中でもっとも少なかったにもかかわらず生活時間の計画化に相当する部分のページ数は6冊の中でもっとも多く、生活時間の計画化の部分にウエイトを置いた記述となっていることがわかる。

生活時間の計画化の主な内容は教科書の本文の記述をもとにまとめたものである。内容としては、生活時間の計画化の意義と方法にわけられる。具体的な記述はページ数のばらつきに示されるとおり各教科書で異なっているが、基本的な記述をまとめると次のとおりである。生活時間の計画化の意義としては、生活の質の向上と心身の充実のためという考え方にまとめられるものが多い。教科書2)では家庭生活や家族関係の円滑な運営のためという意味が述べられている。教科書5)および6)では、生活設計あるいはライフステージごとの計画という文脈で1日の生活時間の計画化をとらえているのが特徴である。

生活時間の計画化の方法については、具体例を載せてある3)と5)の教科書のほかは、抽象的な記述にとどまっている。基本的には、1日24時間を各行動に的確に調整、配分することの重要性を述べているものが多い。教科書6)では、抽象的表現ではあるが、1日あるいは1週間といった単位の計画化だけでなく、ライフステージごとの時間配分のバランスといった計画化の方法を述べ

表1 高等学校家庭科の教科書における生活時間の計画化

生活時間と労力の管理		生活時間の計画化	
教科書	頁数	主な内容	主な内容
1)	5	<ul style="list-style-type: none"> 生活時間の実態 生活時間のゆとり 家事労働 職業労働 	0.06 <ul style="list-style-type: none"> 「生活時間の実態」の中で記述 職業労働時間、家事労働時間、社会的・文化的生活時間（自由時間）を、1日24時間のうちにバランスよく配分することが充実した生活に結びつく
2)	3	<ul style="list-style-type: none"> 生活時間 家事労働 職業労働 	0.15 <ul style="list-style-type: none"> 「生活時間」の中で記述 家族一人ひとりが家庭生活や家族関係を円滑に運営していくことを考えたうえで、家族の生活時間を関連させ、家族の一員としての行動ができるように計画・調整する必要がある。
3)	4	<ul style="list-style-type: none"> 生活時間の分類 生活時間の実態 生活時間の計画 職業労働 家事労働 自由時間の充実 	0.47 <ul style="list-style-type: none"> 「生活時間の計画」の中で記述 生活時間の計画にあたっては、生活の質の向上と心身の充実のため、生活時間を的確に配分する 具体的内容は図1左に示す
4)	3.55	<ul style="list-style-type: none"> 生活時間の計画 家事労働 職業労働 生活時間の充実 	0.18 <ul style="list-style-type: none"> 「生活時間の計画」の中で記述 生活を有意義に過ごすためには、どれだけの時間をどのように使うかを十分考えることが大切 家族生活の目標を達成するためには、生活時間を、いつ・どのくらい・何に配分していくか、適切に調整することが大切
5)	2.59	<ul style="list-style-type: none"> 生活時間の実態 生活時間の計画 家事労働 	0.63 <ul style="list-style-type: none"> 「生活時間の計画」の中で記述 生活時間の計画は、生活設計を実質的に裏付けるもの 生活時間には1日24時間という限界があり、自然環境や社会環境に支配される さらに睡眠、食事など日常不可欠な時間を差し引いた残りが計画化できる時間 具体的内容は図1右に示す
6)	6	<ul style="list-style-type: none"> 生活時間の分類 ライフステージと生活時間 職業労働 家事労働 生活時間の改革 余暇活動 	0.28 <ul style="list-style-type: none"> 「ライフステージと生活時間」、「生活時間の改革」の中で総合的に記述 1日あるいは1週間という短期間の生活時間の計画だけでなく ライフステージごとに、時間をどうバランスよく使うかも考えなければならない

生活時間の計画

- ① 時間の配分は、無理なくむだなく実行可能な範囲で計画する。緊張が続くような内容だと、実行できないので、くつろげる内容も加え、調和を保つ。
- ② 家族各自の計画は、それぞれの特性を生かしながら各自責任をもって立案し、家族間で検討・調整し決定する。
- ③ 家族各人の生活を尊重するとともに、コミュニケーションの時間を確保する。
- ④ 労働時間の短縮、家事労働の能率化をとおして、自由時間を生み出す努力をする。
- ⑤ 自由時間は、人間性の向上、豊かな高齢期の生活のために、しっかり確保する。



生活時間計画の柱

出典：教科書5)

出典：教科書3)

図1 高等学校教科書における生活時間の計画化の具体例

ている。教科書3)と5)の具体例を図1に示した。とくに教科書3)では、計画の実行可能性、個人と家族との関係、職業労働時間・家事労働時間・自由時間の関連などについての配慮をうながしていることは注目すべきである。

6. まとめと今後の課題

高等学校家庭科の教科書の中で、「生活時間と労力の管理」全体をみわたせば、現在の生活時間研究の成果と関連をもっている。とくに職業労働時間、家事労働時間、自由時間についての記述は生活時間研究の成果を十分に反映しているといえる。しかしながら、「生活時間の計画化」に限定した場合の教科書の記述は、必ずしも現在の一般の生活時間研究の成果と関連をもっているとはいえない。時間の使い方についてのノウハウを示した文献とも異なっている。もちろん、生活時間の計画化が必要であることの背景、たとえば国民の現実の生活時間配分の中にある多様な偏りなどは現在の生活時間研究から明らかになることである。しかし、そこからどのように生活時間の計画化を考えていったらよいかについては、現在の生活時間研究はほとんど明らかにしていない。教科書の記述をみても執筆者の苦心の跡がうかがえる。

本稿で検討したような研究と教育との乖離はすべての教科の教育においてみられるものではないかもしれない。しかしながら、少なくとも家庭科教育においては、筆者が担当している家庭経営分野だけに限定してもいくつかの分野で検討を迫られている。生活時間と労力の管理の中にある「自由時間の充実した過ごし方の工夫」はその一つである。自由時間に関連した生活時間研究の成果からだけでは充実した過ごし方の工夫までは明らかにならないかもしれない。生活設計の分野も同様の検討を必要としている。ライフサイクル、ライフコースなどの研究の進展にはめざましいものがあるが、その研究成果と実際の生活設計とをつなげる橋渡しは必ずしもうまくできていないように思う。

家庭科教育にあるこうした困難の背景には家庭科教育が「よりよい生活」を実現させるための実践ということを目標としていることをあげることができる。よりよい生活の問題は倫理、道徳と切り離せないからである。「時間を無駄にしない」生活、「時間を守る」生活がそうでない生活「よりよい」と考えるのは倫理、道徳の問題である。倫理、道徳はともすれば教育する側の価値の押しつけを生みやすい。このようなテーマについて、価値の押しつけでなく、論理的に生徒に考えさせ理解させる教育内容、教育方法を考えることは家庭科教育、ひいては「よりよい生活」と結びついた内容をあつかう教科の教育の今後の課題である。

<参考文献>

Converse, P. E. 1968. 'Time Budget.' in *International Encyclopedia of the Social Science*, Vol. 16, Macmillan. pp. 42-47.

- B・フランクリン (松本慎一, 西川正身訳) 1957 フランクリン自伝 岩波書店
J・B・ケンドリック, J・W・ケンドリック (山根一眞監訳) 1991 「豊かさ」への自己管理術 日本生産性本部
S・B・リンダー (江夏健一ほか訳) 1971 時間革命 好学社
文部省 1989a 高等学校学習指導要領解説 家庭編 実教出版
文部省 1989b 小学校指導書 道徳編 大蔵省印刷局
文部省 1989c 中学校指導書 道徳編 大蔵省印刷局
W・E・ムーア (丹下隆一, 長田攻一訳) 1974 時間の社会学 新泉社
野口悠紀雄 1995 続「超」整理法・時間編 中央公論社
矢野眞和 1995 生活時間の社会学 東京大学出版会

(受理 1998年12月10日)

[Abstract]

Time Use Planning in Home Economics Education

Michinori HIRATA

This paper examines the relationship between time budget research and home economics education. Home economics education includes topic on time use planning of individuals or family. On the contrary, time budget research is focused on analyzing main trends and subgroup differences in allocation of time. The author examined the textbooks of home economics in senior high school. The analysis shows that in the textbooks there are many results of time budget research followed by statements about time use. However, there are few models in time budget research dealing with time use planning. Time budget research has not been concerned with time use planning because of ethical reasons. It can be said that there is difference between time budget research and home economics education with regards to time use planning.